ハテノウタ 新聞

2017年3月2日発行　週刊　毎週木曜日発行
http://www.c-mono.com/hatenouta/

発行 第3号 2頁建

2017年3月2日〔木曜日〕

発行所　有限会社キューカンバー
京都市東山区蒔田町549-3 藤ビル2F
〒605-0942
TEL075-525-2195
MONO　発行人　MONO新聞部
【無料】

記者懇談会・後編

創作の契機から、詳細な内容まで!!
『ハテノウタ』の魅力と挑戦

いよいよ明日から、MONO『ハテノウタ』の公演が始まります。上演に先がけて、記者懇談会の様子を特集。詳細な設定、隠れたテーマ、創作の過程など、語られてこなかったエピソードを2回にわたってお伝えします。

―土田さんはまもなく50歳になられるということですが、創作の動機としては何か関係がありましたか?

土田　おそらく僕は「老い」に対する抵抗が強いんだと思います。若いままでいたい。実際には、まだ体力の衰えは全く感じないんです。でも、やはり社会的な見られ方は変わりますよね?　立場を変えられていっちゃう。例えば、友人関係でも私自身はあまり年上年下ということを気にしないので、年配の人にも慣れるとタメ口になるし、若い子からそういう扱いを受けても気にならない。ただ、年下の子に「ちょっとメシ行こうよ」と誘った時なんか、もしかしたら、先輩から命令されてるって感じで受け取られてないかと心配になることがあります。「嫌なときは嫌って言ってね」と言っても「行きたいです」と返してくれる。だけど「それは本心だろうか?」って疑ってしまったり(笑)。社会の中での、記号しての年齢が上がって行くっていうことが、すごく嫌なんです。こういう考えが芝居にも出ているだろうと思いますね。

―もし、本当にこの薬があったとしたら、土田さんは飲みますか?

土田　僕はね……飲んじゃいますね。本当は年齢をきちんと受け入れる人間でいたい。皺なんて、その人の年輪だし人生ですもんね。でもこの前、リフトアップの広告をつい立ち止まって読んでいる自分を発見しましたし。ちなみに「ほうれい線を消す体操」もしたことがあります(笑)。だから、こんな薬があったら真っ先に飲むでしょうね。本当、情けないですけど。

―上演時間とシーンの時間は、一致しているのでしょうか?

土田　今のところ一致しています。上演時間が90分の芝居で、舞台上でも90分の時間が流れます。

―この芝居の世界では「100歳になったら死なないければならない」というのは強制されているのでしょうか?

土田　そういう設定になっています。おそらくは、かなり議論があったと思うんです。100歳を超えても外見は若いまま。けれど、身体のどこかは悪いので労働人口にはならない。そんな人間ばかりが増えてしまったらどうするんだと。

そういう状態の中で、「やっぱり100歳を超えたら死なないといけないんじゃないか」という意見が美談のように出てきたんでしょうね。そういう風潮に押されて、最終的に義務化されたんじゃないかって思います。人はすぐに変化に慣れますから。あり得ないと思っていた法律なんかも意外に決まったりしますしね。今の世の中、まさにタイムスリップものではない、ユーモアを交えた上質な会話劇に仕上げた。また、弥生人の衣装や美術等、スタッフワークも優れ、総合的に高い成果をあげた。」とのこと。また、最優秀賞には、小栗まち絵「いずみシンフォニエッタ大阪 第37回定期演奏会における演奏」が選ばれた。

MONO『裸に勾玉』が平成28年度大阪文化祭賞 受賞!!

2016年3月に大阪、名古屋、東京で上演した『裸に勾玉』が、大阪文化祭賞の優秀賞を受賞した。大阪文化祭賞とは、大阪府内で上演された公演の中から優れた成果をあげたものに対して贈られる賞で、「維新派」「劇団☆新感線」に続いての受賞となった。

受賞理由は、「舞台は弥生時代。狗奴国のある集落に、現代人がタイムスリップする。そこには争い、嫉妬、いじめ、許しなど現代社会と同じ構図があった。啓蒙的なせりふを使わず、弥生時代を舞台に今日的なテーマを示した作・演出の土田英生の視点は秀逸で、独自性がある。俳優陣のアンサンブルも豊か。単なる

有題無題

昨年、祖母が他界した。99歳を間近に控えた大往生だった。今年生きていれば100歳を迎えたはずだから1917年生まれということになるだろうか。記憶にある祖母は、足の悪い祖父に代わって農作業のなかでも力が必要な部分を一手に担い、しかし祖父が言うことには逆らわない、昔ながらの女性だった。総入れ歯の無駄に白い歯でガハハと笑っている印象が強い。十数年前だったか、祖父が他界した。葬儀の日、亡き祖父を乗せ火葬場に向かわんとしている霊柩車に向かって祖母は何かを呟いていた。感謝の言葉か愛の言葉か……聞こえない言葉を想像して勝手に涙した記憶がある。しかしその夜、祖母が呟いていた言葉は私が想像していたものとは違い、彼女の性格もまた、私が記憶しているものはほんの一面にすぎないのだと聞かされた。少なからず残念な気持ちになったが、数年を経て、そんなことはどうでも良いことになった。私の記憶の祖母は変わらず白い歯を見せて笑っている。それで良い。

それが起きてますから。僕が高校生の頃、原付でのヘルメットの着用が義務付けられたんです。その頃は「ヘルメットをかぶるなんてあり得ない」と思ってたんですよ。でも今は当然になってしまってる。ヘルメットをしないで原付に乗ることがすごく悪いことだという感覚になってる。人間ってすぐに適応しちゃうんです。だから、100歳で安楽死しなければならないというルールが定まった世界なら、みんな当然のように死ぬのかもしれないですよ。

―全体の設定としては、すごく管理されてる時代ということですよね？

土田　そうです。最初にこの設定をメンバーに話した時も、かなり質問を受けました。これは毎回……MONOではお決まりなんですけど、質問攻撃されます。ヒエラルキーのある劇団ではないので、それは良いところなんですけど。いろいろ言い合えるのは良いところだと思っています。しかし私にとってはつらい時間。矛盾をつく質問が続々と出て来ます。最初は、私の中でも構想が固まってなかったりするので、最後にはもう「そんなん知らん！」って言ってしまうんですけどね（笑）。でもきっと、薬ができた頃、さらには安楽死が決まった時にはすごく反対運動があったと思うんです。ただ、だんだんと推進派が優勢になってきて……。国の管理の問題はもちろんですけれども、怖いのは空気で、薬を飲んでいない人がものすごく変人扱いされていったと思うんですよ。老けていくから外見で判ってしまいますし。薬を飲む飲まないが貧富の差とつながってますから、飲めない人は劣等感を抱く。「あ、こいつ薬飲んでないな」と思われて恥ずかしくなる。そうすると、やっぱりみんな必死で薬を飲むようになるんじゃないかなと。そういう風に管理が徹底された状態におかしいと言いつつも薬を飲んでしまう。止めるタイミングがあったとしたら、薬が一般化しだした頃だったと思いますね。

―土地の設定はありますか？

土田　設定していないですね。僕はときどき架空の方言を作って「その土地の言葉」として使うことがあって。今回も登場人物たちは同郷の人たちなので方言にすることも考えたんですが。昨年、メンバーの尾方宣久が、ケラリーノ・サンドロヴィッチさんが作・演出をされた『キネマと恋人』という作品に出演しまして、その舞台が方言を使った舞台だったんです。それがすごく面白くて、尾方もすごく上手にその方言を喋っていた。会場の世田谷パブリックシアターの皆さんも「尾方さんが方言を喋っているMONOみたいですねとか言ってくださってそのまますぐMONOも方言を使うと、なんか真似ているように思われるかなと思って（笑）だから今回は標準語にしています。尾方には全責任はないんですけどかといってケラさんに責任はないんですけども（笑）。

『ハテノウタ』稽古場にて（撮影：東直子）

―登場人物に同じ苗字の人が2人いますが？

土田　そうなんです。双子の設定です。僕の知り合いの方で双子の方がいて、少し前に片方が結婚した。本当に仲が良くていつも一緒にいる印象がある姉妹だったから、「一方が結婚するってどういう気持ち？」って聞いたら、「やっと別の人間になれた気がする」みたいなことを言ってて、これは双子ならではだなと思ったんです。アイデンティティが未分化というか、お姉ちゃんと自分との差異がないっていう当たり前がある中で、差がつくことで安心するっていう面もあるのかなと。だから薬を飲む飲まないで、年齢と共に顔が違ってくるというのを入れたかったんですね。でもね、稽古をしていると双子見えてくるんです、不思議なことに（笑）。

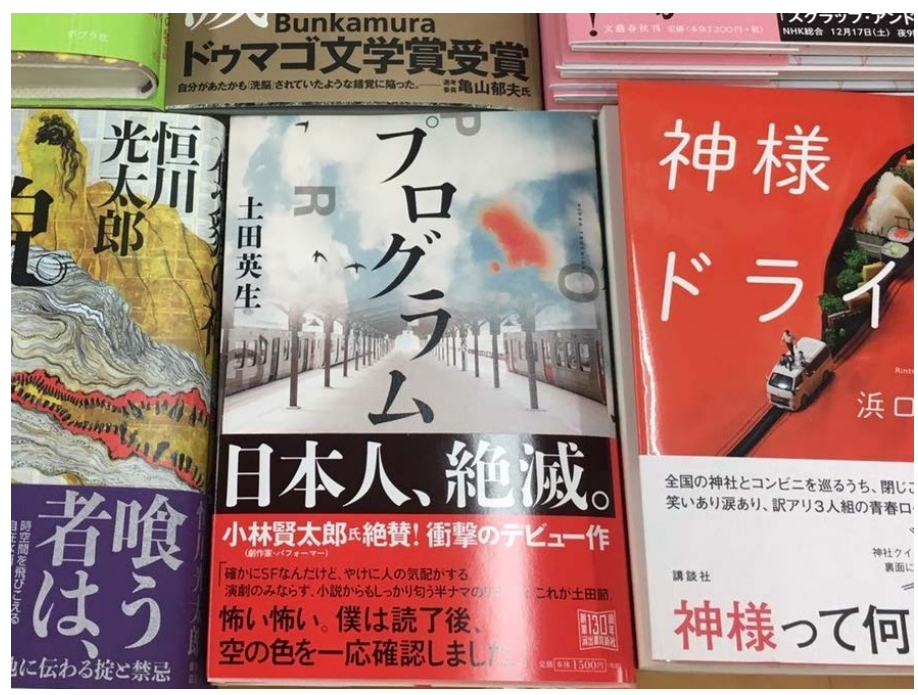
―小説を出版されるんですね。

土田　河出書房新社さんからの書き下ろしで『プログラム』というタイトルの小説を出していただくことになりました。今までには『約三十の嘘』という映画化していただいた作品のノベライズみたいな形で出版させていただいたことはあって、あとは電子書籍で一度小説を書き下ろしています。そういう機会はありましたが、最初から小説を出版目的で書き下ろさせていただくのは初めてです。今までに書いた、いろいろな芝居の断片なども使い、それがつながって長編になるという構成です。以前書いた『燕のいる駅』という芝居で描いた世界がベースになっています。純日本人だけが住む人口の島「日本村」という島の上に、突然、おかしな雲が浮かび、人が静かに死んでいく……。その世界が背後にあって、その日本村で暮らす人たちの様々な話があるという……そういう話です。（土田英生著『プログラム』・2月28日発売・河出書房新社・定価1620円）

追記・本番直前の稽古場から

……色々と遅れた。わかっている。遅れの原因は私の台本だ。役者の皆も余裕がない。私も余裕がない。当然のように殺伐となるはずの状況なのだが、そこはさすがに長くやっているメンバー、そして明るい女優陣のおかげで笑いも出る状態だ。正直、そんな中でも私はここ数日、とても苦しかった。芝居の全貌が見えてこない。いつもなら「あとはどことどこを直せばいい」という判断が出来ているはずなのだが、今回に限っては演出の私がその判断をすることが出来ないでいた。

けれど……本当に今日。やっと尻尾を掴んだ。稽古は残り二回。もちろん少ないが、それでも掴んだ状態で二回は稽古ができるのだ。なんとかなる。今日はそう思えた日だった。残りも全力だ。（土田英生）



書店にならぶ『プログラム』（土田英生）

MONO『ハテノウタ』は3月3日より3月7日、大阪ABCホールを皮切りに北九州芸術劇場小劇場（3月11日・12日）、四日市市文化会館第一ホール（3月18日・19日）、東京芸術劇場シアターウエスト（3月24日～29日）で上演される。料金は会場にて異なる。問合せ・キューカンバー075（525）2195。